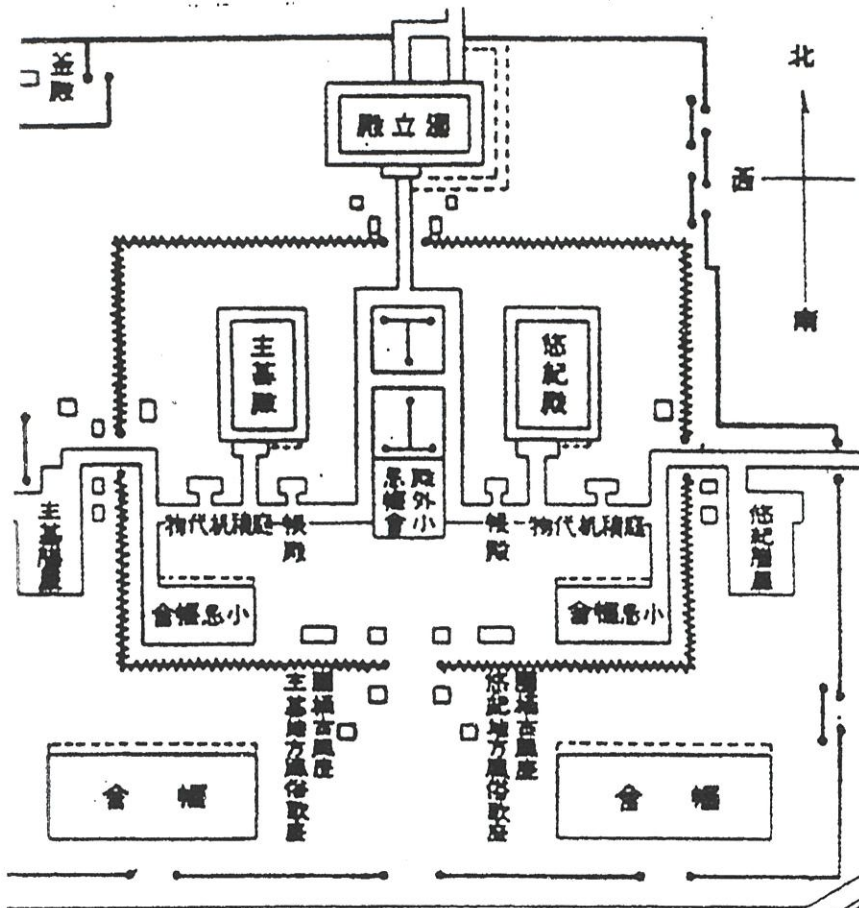
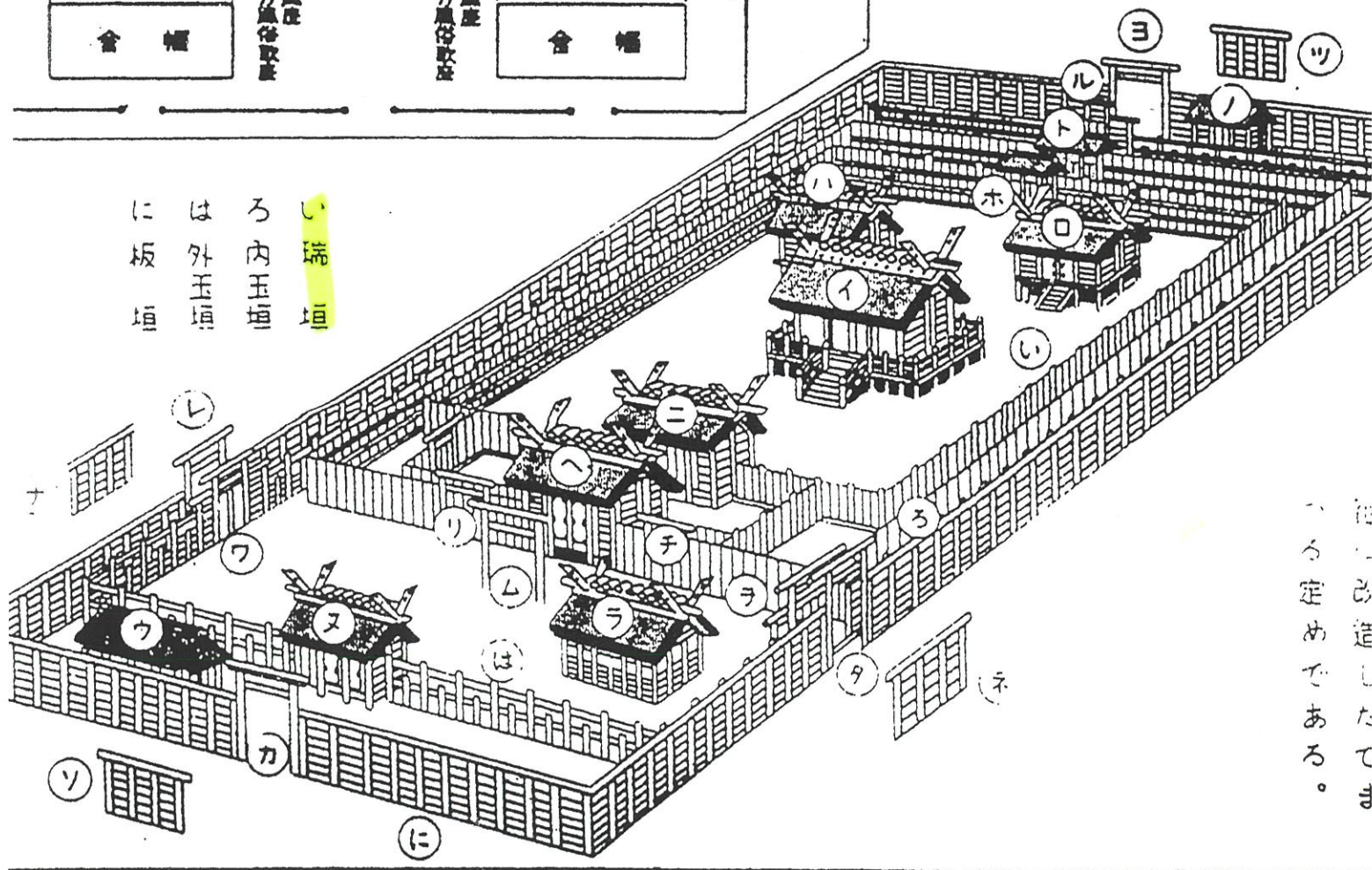


大嘗宮の正面と平面圖



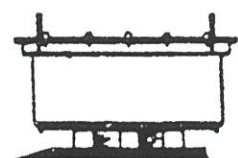
- イ 正 殿
- ロ 東 賣 殿
- ハ 西 賣 殿
- ニ 瑞 垣 南 御 門
- ホ 瑞 垣 北 御 門
- ヘ 内 玉 垣 南 御 門
- ト 内 玉 垣 北 御 門
- チ 東 掖 御 門
- リ 西 掖 御 門
- ヌ 外 玉 垣 南 御 門
- ル 外 玉 垣 北 御 門
- ヲ 外 玉 垣 東 御 門

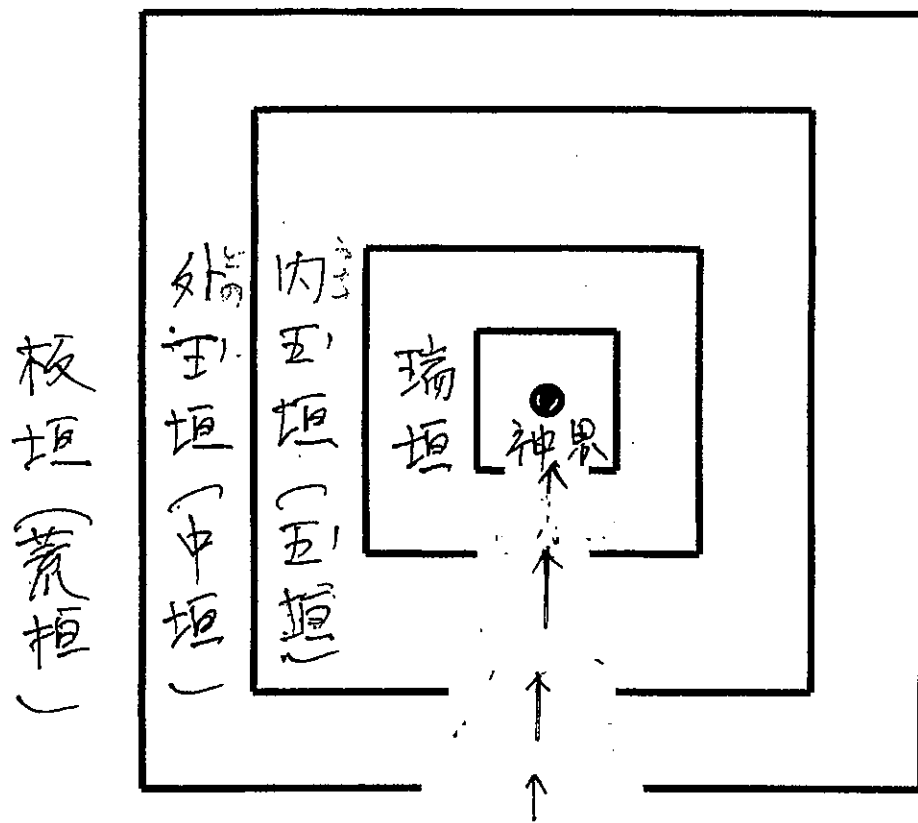
- カ 板 垣 南 御 門
- ヨ 板 垣 北 御 門
- タ 板 垣 東 御 門
- レ 板 垣 西 御 門
- ソ 南 暮
- ツ 北 暮
- ネ 東 暮
- ナ 西 暮
- ラ 四 文
- ム 中 鳥
- ウ 南 宿 衛
- ノ 北 宿 衛



い 瑞垣  
ろ 内玉垣  
は 外玉垣  
に 板垣

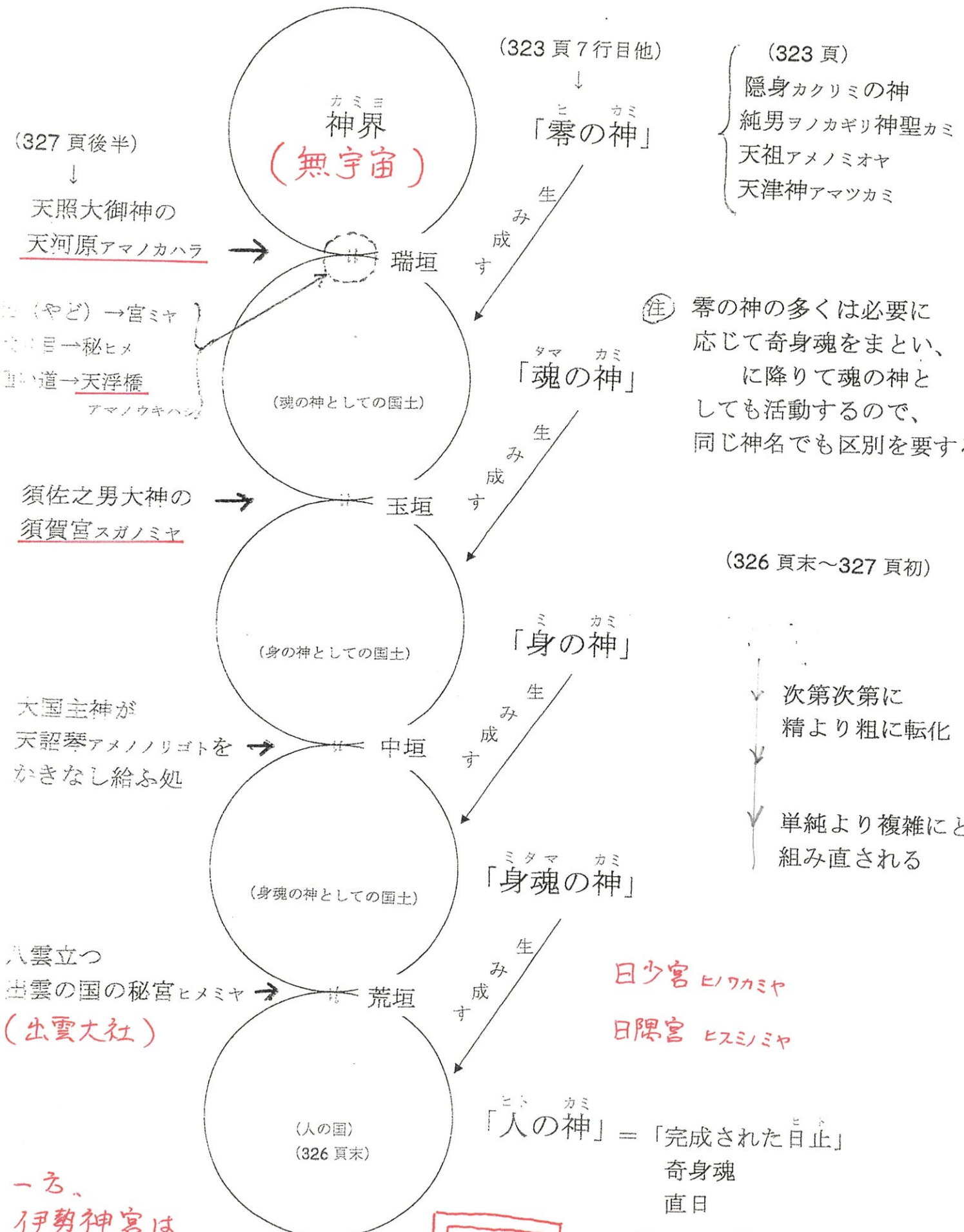
はる定めである。



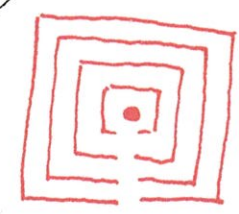


赤丸は通常、御神体の在るべき

神社の構造も、本来は「神界」に在る「大中心」を四重の「垣」で囲むのが正しい造り方であり、それらの垣は各々、界と界とを分ける四段階の「境界」を象徴している。

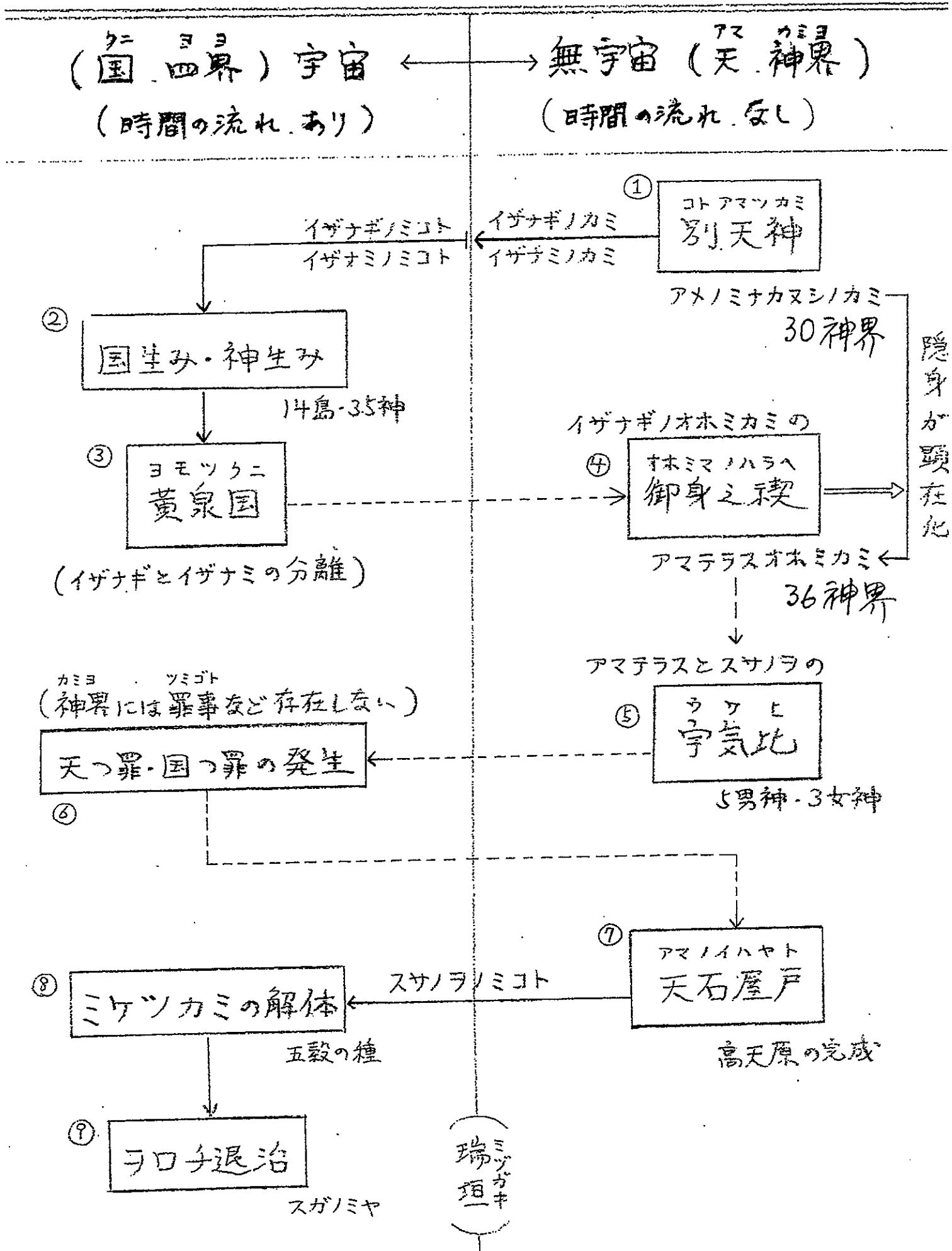


一方、  
伊勢神宮は  
単独で、五つの階層全体を  
象徴している。



四重の垣は各々、(内側から)  
瑞垣、玉垣、中垣、荒垣の象徴  
中心の本殿は神界を表す。

図表：古事記の神話の前半部の構成





時女ときじょうらう藤とうの原義なのである。大阪市外歌島村字野里の氏神祭には少女六人が、下髪に白絹の被を着て一夜官女としての参籠(7)をする」と書いているが、寛政八年（一七九七）から十年の間に書かれた秋里籬島の『摂津名所図会』の卷三の「一夜官女」の条にも、「野里村の本居うぶすな神住吉の例祭の時、此里の民家より、十二三計ばかりの女子に衣裳を改め神供を備ふ。これを野里の一夜官女といふ」とある。

この一夜官女が神宮采女であり、出雲国造は「神供」の「神」となって、「神供」の神妻（一夜官女）を「神宮采女」と称して妾にしていたのである。一方、『日本書紀』の允恭天皇七年十二月一日条に、新嘗の「新室にひむろの宴うたげ」のとき、一夜妻として天皇に「娘女をみな」を奉ったとあり、天皇も出雲国造と同じく「神」、正確には神の依代になっている。

大嘗祭の神座と御座の関係は、出雲大社の西面する神座と御座の関係にあてはまる。御座の東面は、宮廷で祀る八神殿の東面と同じ意味をもち、神魂神社の東面にも同じ意味がある。八神殿も神魂神社も、その神座は神籬ひもろぎ（依代）と意識されているから、神の依り来る東の方向に向いている。ところが出雲大社は、記・紀や風土記に明記されているように、最初から神の住居として造営された。したがって、その神座は、神が住む場所として東に位置し、この神と「ハレ」の日に対面する依代（出雲国造）が東面することになったのであろう。大嘗祭における神座と御座の図の右側の、神座（短畳）と御座の関係である。

出雲大社の神殿は、大嘗祭の悠紀・主基ゆき すきの常設殿のようなものだが、このような、出雲大社の神座と悠紀・主基殿の神座の共通性は、天照大神の依代が天皇なのに対し、大国主神の依代が出雲国造だったからであろう。大嘗祭で出雲国造のみが服属儀礼の神賀詞かむよことを奏上するのは、大国主命が天照大神に国譲りした神話世界の現実的表現なのである。

神無月と神有月の意味

天照大神を朝日の象徴とみれば、大国主神は夕日の象徴である。しかし、夕日は朝日となつて再び東から登場する。根の国は常世の国と重なり、死は再生への休息であり「夜栖やすみ」である。

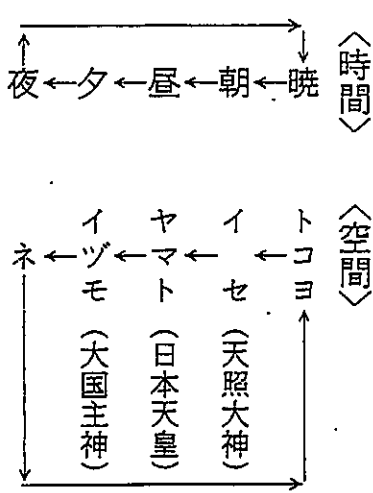
「日隅宮」と『日本書紀』が書く出雲大社を、『出雲国風土記』は「日栖宮」と書く。日が沈む西を「日ノヨコシ」と

いうのは、日が栖すまかに入り、横になって寝ることである。この場所が根の堅州国である。その「夜栖」の過程で再生した「いのち（靈・日・火）」は、常世の国から依り来るとみられていた（靈・日の「ヒ」は上代特殊仮名遣では甲類、火は乙類だが、観念としては同じである。ただ天の「ヒ」は日、地の「ヒ」は火であるから、「ヒツギ」も、天皇の場合は「日継」、出雲国造の場合は「火継」と書く）。

『万葉集』（巻一、藤原宮御井の歌）や『高橋氏文』によれば、東は「日ノタツシ（タテシ・タタシ）」、西は「日ノヨコシ」といわれていた。日が立ち上がる所が日の「タツシ」であり、日が横になって寝やすむ所が日の「ヨコシ」である。この表現は、沖繩で東を「アガリ」、西を「イリ」といい、アイヌの人々が東を「チュエプ・ポク（上がる太陽）」、西を「チュエプ・カ（下がる太陽）」というのと同じである。また、南を「ソトモ」、北を「カゲトモ」というが、日の照る面が「ソト面モ」であり、その影になる面が「カゲト面モ」なのである。

一日とは、太陽が日ノタツシから日ノヨコシに至るまでをいうが、古代の人はこの時間を「ヒト」の活動する時、夜から曉までを「カミ」の活動する時とみた。この時間意識と空間意識を重ねたのが、上の図である。

このような時間と空間の構成は、国号を「日本」とした古代天皇制の確立過程のなかで行なわれた。国譲りの代表神 大國主神を創作し、この神を「日の隅（栖）」の宮に鎮座させた発想は、「日出処天子」「日本天皇」の発想と重なり、大國主神は、「日本」天皇の祖神天照大神の対極の神として、記紀神話における出雲の神となり、出雲大社の祭神になったのである。



以上述べたように、出雲大社の祭神大國主命は、大和王権にとっては伊勢神宮の天照大神と共に重要な意味をもっていたが、出雲の人々にとっては無関係であった。だから、『出雲国風土記』には大國主神という神名がまったく登場してこないのである。

陰曆十月には、出雲大社に日本中の神が集まるといわれている。この月は他の地方で

は「神無月」、出雲では「神有月」と呼ばれ、陰曆十月十一日から十七日までの七日間、出雲大社で神有祭が行なわれるが、これも、日本中の神を大國主神と一体化させるために作られた伝承であろう。

『出雲国造神賀詞』には、出雲の神社百八十六社の代表として、国造が神賀詞を奏上するとある。この神賀詞に大國主神が出てこないのは、葦原中国を国譲りする側の神の代表にもっとも適わしい神名として作られ、神賀詞がはじめて奏上された靈龜二年（七一六）二月には（宇佐八幡宮でも、靈龜二年は中央政權とのかかわりにおいて画期的な年である）まだ定着していなかったためだが、八百万の神々の依代となつての神賀詞の奏上は『続日本紀』に載る七例がすべて二月で、『続日本後紀』に載る天長十年のみ十月）、出雲国造が天照大神に服屬を誓う儀礼であった。

前掲の図のような、伊勢と出雲についての記・紀の時間・空間意識も、そのような意図を達成するために考案されたものであろう。

#### 注

- (1) 西宮一民「神名の釈義」『新潮日本古典集成・古事記』所収、昭和五十四年。
- (2) 西郷信綱『古代人の夢』一六五頁、昭和四十七年。
- (3) 西郷信綱「黄泉の国と根の国」、注2前掲書所収。
- (4) 千家尊統『出雲大社』一一八頁、一五八―一六〇頁、昭和四十三年。
- (5) 松前健『古代伝承と宮廷祭祀』一一八頁、昭和四十九年。
- (6) 吉野裕子『陰陽五行思想からみた日本の祭』二二三頁、昭和五十三年。
- (7) 中山太郎『愛欲三千年史』四八頁、昭和十年。

大日本後禊所神納宮宮域内規約

第一條 大日本後禊所八大日本神道ノ神傳ヲ

奉戴シテ神國樂園ヲ築成ス。

第二條 宮域内ヲ聖境ト成スガ爲ニ日夜間斷

無ク神儀祭事ヲ執行ス。

第三條 宮域内ニ住スル者ハ日夜間斷無ク神

言靈ヲ奉緝スベシ。

第四條 神國樂園ヲ築クヲ目的トナスガ故ニ

各人各自ハ各人各自ニテ健全圓滿ノ身心ヲ築

成スベシ。



第五條 各人各自が健全圖畫ノ身心ヲ築キクガ

為ニ日神事ヲ授ク。

第六條 日神事ヲ行ジ得タル時八月神事ヲ授

グ逐次ニ火神事・伊邪那岐神事・高木神

事・大日靈貴尊神事・八神神事・天祖神事。

大日本統一魂神神事。大湊別神儀ヲ授ク。

第七條 神事ヲ受ケタル者ハ神ノ宇氣比ノ

通遯遷タル證左ヲ身ニ顯ハス毛ノトス。

第八條 神ノ宇氣比存ル人ヲ大日本後禊所語

部宮ノ主タル神直日トス。

第九條

神直日ハ神田築成ヲ終生ノ任トナ

ト共ニ

神直日ヲ養育ス。

第十條

神直日ハ神ノ宇氣此ニ依リテ其ノ子

第二宇

氣毘ヲ授ク。

第十一條

宇氣毘アル者ハ終生師資ノ禮ヲ守

ラザルベカラズ。然ラザル時ハ高木神天返矢

ノ神罰ヲ受テザルベカラズ。

第十二條

高木神天返矢ヲ受ケタル者ハ今世

ニテ神直日タルコト能ハザルノミナラズ死後

ト雖日若宮ニ入ルコト能ハズ。

カミナホヒノミヤ

カミナホヒノミヤ

カミナホヒノミヤ

カミナホヒノミヤ

カミナホヒノミヤ

第十三條 死後ニ日若宮ニ入ルコト能ハザル

モノヲ調伏濟度救出攝入スルハ神直カミナホ日ノ任務

ナリト雖其ノ人人ニシテ現身ヲ正善美ナラシ

ムルコトナキ時ハ幾轉生ノ後ヲ待タザルベカ

ラズ。

第十四條 宮域内ニ任スルモノノ次序ハ神直カミナホ

日ノ定ムルトコトス。

以上 昭和十年十一月一日

大日本後醍醐所神納宮宮域内規約

七 普通「出雲」の枕詞として用いられる語であるが、ここは八重の雲が湧き起る意に解すべきであらう。

八 湧き出る雲は八重の垣(を作る)の意。「出雲」を地名と見る説もある。垣は家の周囲にめぐらすかこい。雲が家の周囲に八重の垣を作りなす意。

九 妻を籠らせるために。「ゴミ」の(微)は乙類の仮名であるから、この語は上二段に活用したもので、書紀に「ツマゴメニ」とあるゴメと同意に解すべきである(橋本進吉博士説)。

一〇 その八重の垣よ。「を」は感動の助詞。

一一 大人の意。首長、長官。

一二 稲田宮主は稲田の宮の首長、稲田も須賀も地名、八耳は不明。書紀の本文にはアシナツチ・テナツチの二神に稲田宮主神の名を賜うたとあり、第一の一書には稲田媛を稲田宮主饗狭之八箇耳の女子とし、第二の一書にはこれを妻の名としている。

一三 夫婦の寝所で事を始めて、即ち交接を始めて。書紀には「相与違合而」「於奇御戸」為起而」などとする。

一四 名義未詳。書紀の一書には「清之湯山主三名狭漏彦八鳥篠」とあって、「篠、小竹也。此云三斯奴。」と注している。

一五 「大」は「若」に対する語。年は年穀の意。

一六 宇迦はウケと同じく食の意。書紀には「倉稻魂」をウカノミタマと訓んでいる。食物(稻)の御魂の神。

一七 名義未詳。

一八 籠の神で、谷間の水を掌る神の意。  
一九 日河は水川と同じか。水に縁のある神。  
二〇 これも水に縁のある神と思われるが、「夜礼花」の意が明らかでない。

前<sup>ま</sup>以<sup>も</sup>ちて刺<sup>さ</sup>し割<sup>き</sup>きて見<sup>み</sup>たまへば、都<sup>つ</sup>牟<sup>む</sup>刈<sup>り</sup>の<sup>た</sup>ち<sup>あ</sup>在<sup>あ</sup>りき。故<sup>こ</sup>、此<sup>こ</sup>の<sup>た</sup>ち<sup>あ</sup>大<sup>た</sup>刀<sup>あ</sup>を<sup>と</sup>りて、異<sup>あ</sup>やしき<sup>あ</sup>物<sup>もの</sup>と思<sup>おも</sup>ほして、天<sup>あ</sup>照<sup>て</sup>大<sup>お</sup>御<sup>お</sup>神<sup>かみ</sup>に白<sup>しろ</sup>し上<sup>あ</sup>げたまひき。是<sup>こ</sup>は<sup>く</sup>草<sup>く</sup>那<sup>な</sup>藝<sup>ぎ</sup>の<sup>た</sup>ち<sup>あ</sup>大<sup>た</sup>刀<sup>あ</sup>なり。

那藝の二字は音を以るよ。

故<sup>こ</sup>是<sup>こ</sup>を<sup>も</sup>以<sup>も</sup>ちて其<sup>その</sup>の速<sup>すみ</sup>須<sup>す</sup>佐<sup>さ</sup>之<sup>の</sup>男<sup>おとこ</sup>命<sup>のみこと</sup>、宮<sup>みや</sup>造<sup>つく</sup>る<sup>べき</sup>地<sup>とち</sup>を<sup>と</sup>出<sup>い</sup>雲<sup>い</sup>國<sup>くに</sup>に<sup>ま</sup>求<sup>もと</sup>ぎ<sup>たま</sup>ひき。爾<sup>しか</sup>に<sup>す</sup>須<sup>す</sup>賀<sup>が</sup>よ。此<sup>こ</sup>の<sup>に</sup>二<sup>に</sup>字<sup>に</sup>は<sup>を</sup>以<sup>を</sup>る<sup>よ</sup>。下<sup>した</sup>は<sup>こ</sup>れ<sup>に</sup>効<sup>を</sup>へ。の<sup>の</sup>地<sup>ち</sup>に<sup>に</sup>到<sup>いた</sup>り<sup>坐</sup>して<sup>詔</sup>り<sup>たま</sup>ひし<sup>く</sup>、「吾<sup>われ</sup>此<sup>こ</sup>地<sup>ち</sup>に<sup>あ</sup>て、我<sup>われ</sup>が<sup>御</sup>心<sup>こころ</sup>須<sup>す</sup>賀<sup>が</sup>須<sup>す</sup>賀<sup>が</sup>斯<sup>し</sup>。」と<sup>の</sup>り<sup>たま</sup>ひて、其<sup>その</sup>地<sup>ち</sup>に<sup>宮</sup>を<sup>作</sup>り<sup>て</sup>坐<sup>ま</sup>し<sup>き</sup>。故<sup>こ</sup>、其<sup>その</sup>地<sup>ち</sup>を<sup>ば</sup>

今<sup>いま</sup>に<sup>須</sup>賀<sup>が</sup>と<sup>云</sup>ふ。茲<sup>こ</sup>の<sup>大</sup>神<sup>かみ</sup>、初<sup>は</sup>めて<sup>須</sup>賀<sup>が</sup>の<sup>宮</sup>を<sup>作</sup>り<sup>たま</sup>ひし<sup>時</sup>、其<sup>その</sup>地<sup>ち</sup>より<sup>雲</sup>立<sup>た</sup>ち<sup>騰</sup>り<sup>き</sup>。爾<sup>しか</sup>に<sup>御</sup>歌<sup>うた</sup>を<sup>作</sup>み<sup>たま</sup>ひ<sup>き</sup>。其<sup>その</sup>の<sup>歌</sup>は、

八<sup>や</sup>七<sup>しち</sup>雲<sup>くも</sup>立<sup>た</sup>つ 出<sup>い</sup>雲<sup>い</sup>八<sup>や</sup>七<sup>しち</sup>垣<sup>がき</sup> 妻<sup>つ</sup>籠<sup>かご</sup>み<sup>に</sup> 八<sup>や</sup>七<sup>しち</sup>垣<sup>がき</sup>作<sup>る</sup> その<sup>その</sup>八<sup>や</sup>七<sup>しち</sup>垣<sup>がき</sup>を

ぞ。是<sup>こ</sup>に<sup>其</sup>の<sup>足</sup>名<sup>な</sup>椎<sup>すい</sup>神<sup>かみ</sup>を<sup>喚</sup>び<sup>て</sup>、「汝<sup>な</sup>は<sup>我</sup>が<sup>宮</sup>の<sup>首</sup>任<sup>に</sup>れ。」と<sup>告</sup>言<sup>の</sup>り<sup>たま</sup>ひ、且<sup>ま</sup>名<sup>な</sup>を<sup>負</sup>せて、稲<sup>い</sup>田<sup>だ</sup>宮<sup>みや</sup>主<sup>ぬし</sup>須<sup>す</sup>賀<sup>が</sup>之<sup>の</sup>八<sup>や</sup>七<sup>しち</sup>神<sup>かみ</sup>と<sup>號</sup>け<sup>たま</sup>ひ<sup>き</sup>。

故<sup>こ</sup>、其<sup>その</sup>の<sup>櫛</sup>名<sup>な</sup>田<sup>だ</sup>比<sup>ひ</sup>賣<sup>め</sup>を<sup>以</sup>ち<sup>て</sup>、久<sup>く</sup>美<sup>み</sup>度<sup>と</sup>邇<sup>に</sup>起<sup>おこ</sup>して、生<sup>な</sup>める<sup>神</sup>の<sup>名</sup>は、八<sup>や</sup>七<sup>しち</sup>島<sup>しま</sup>士<sup>じ</sup>奴<sup>ぬ</sup>美<sup>み</sup>神<sup>かみ</sup>。下<sup>した</sup>は<sup>こ</sup>れ<sup>に</sup>効<sup>を</sup>へ。と<sup>謂</sup>ふ。又<sup>また</sup>大<sup>お</sup>山<sup>やま</sup>津<sup>つ</sup>見<sup>み</sup>神<sup>かみ</sup>の<sup>女</sup>、名<sup>な</sup>は<sup>神</sup>大<sup>お</sup>市<sup>いち</sup>比<sup>ひ</sup>賣<sup>め</sup>を<sup>娶</sup>して<sup>生</sup>め<sup>る</sup>子<sup>こ</sup>は、

大<sup>お</sup>年<sup>とし</sup>神<sup>かみ</sup>。次<sup>つぎ</sup>に<sup>宇</sup>迦<sup>か</sup>之<sup>の</sup>御<sup>お</sup>魂<sup>たま</sup>神<sup>かみ</sup>。二<sup>に</sup>柱<sup>はしら</sup>。宇<sup>う</sup>迦<sup>か</sup>の<sup>二</sup>子<sup>こ</sup>は、兄<sup>あに</sup>八<sup>や</sup>七<sup>しち</sup>島<sup>しま</sup>士<sup>じ</sup>奴<sup>ぬ</sup>美<sup>み</sup>神<sup>かみ</sup>、大<sup>お</sup>山<sup>やま</sup>津<sup>つ</sup>見<sup>み</sup>神<sup>かみ</sup>の<sup>女</sup>、名<sup>な</sup>は<sup>木</sup>花<sup>はな</sup>知<sup>ち</sup>流<sup>りゅう</sup>。此<sup>こ</sup>の<sup>に</sup>二<sup>に</sup>字<sup>に</sup>は<sup>を</sup>以<sup>を</sup>る<sup>よ</sup>。比<sup>ひ</sup>賣<sup>め</sup>を<sup>娶</sup>して<sup>生</sup>め<sup>る</sup>子<sup>こ</sup>は、布<sup>ふ</sup>波<sup>は</sup>能<sup>の</sup>母<sup>も</sup>遲<sup>ち</sup>久<sup>く</sup>奴<sup>ぬ</sup>須<sup>す</sup>奴<sup>ぬ</sup>神<sup>かみ</sup>。此<sup>こ</sup>の<sup>神</sup>、淤<sup>お</sup>加<sup>か</sup>美<sup>み</sup>神<sup>かみ</sup>の<sup>女</sup>、名<sup>な</sup>は<sup>日</sup>河<sup>か</sup>比<sup>ひ</sup>賣<sup>め</sup>を<sup>娶</sup>して<sup>生</sup>め<sup>る</sup>子<sup>こ</sup>は、深<sup>ふか</sup>淵<sup>ふち</sup>之<sup>の</sup>水<sup>みづ</sup>夜<sup>や</sup>禮<sup>れ</sup>

神<sup>かみ</sup>。此<sup>こ</sup>の<sup>神</sup>、淤<sup>お</sup>加<sup>か</sup>美<sup>み</sup>神<sup>かみ</sup>の<sup>女</sup>、名<sup>な</sup>は<sup>日</sup>河<sup>か</sup>比<sup>ひ</sup>賣<sup>め</sup>を<sup>娶</sup>して<sup>生</sup>め<sup>る</sup>子<sup>こ</sup>は、深<sup>ふか</sup>淵<sup>ふち</sup>之<sup>の</sup>水<sup>みづ</sup>夜<sup>や</sup>禮<sup>れ</sup>

ふ。仍りて日の少宮に留り宅みましきといふ。少宮、此をば倭柯美野と云ふ。

始め素戔嗚尊、天に昇ります時に、溟渤以て鼓き盪ひ、山岳為に鳴り响えき。此

則ち、神性雄健きが然らしむるなり。天照大神、素より其の神の暴く悪しきことを知

しめして、来詣る状を聞しめすに至りて、乃ち勃然に驚きたまひて曰はく、「吾が弟

の来ることは、豈善き意を以てせむや。謂ふに、当に国を奪はむとする志有りてか。

夫れ父 母、既に諸の子に任させたまひて、各其の境を有たしむ。如何ぞ就くべき

国を棄て置きて、敢へて此の処を窺窬ふや」とのたまひて、乃ち髪を結げて髻に為し、

裳を縛きまつひて袴に為して、便ち八坂瓊の五百箇の御統 御統、此をば美須磨屢と云ふ。

を以て、其の髻鬢及び腕に纏け、又背に千箇の鞞 千箇、此をば知能梨と云ふ。と五百箇

の鞞とを負ひ、臂には稜威の高鞞 稜威、此をば伊都と云ふ。を著き、弓彌振り起て、劍柄

急握りて、堅庭を踏みて股に陥き、沫雪の若くに蹴散し、蹴散、此をば俱穢籜籜籜須

と云ふ。稜威の雄誥 雄誥、此をば鳴多稽眉と云ふ。奮はし、稜威の噴讓 噴讓、此をば拳慮毗と云

ふ。を発して、徑に詰り問ひたまひき。



あまつかみのみもと たてまつりあ  
天神に上献ぐ。

然して後に、行きつつ婚せむ処を覓ぐ。遂に出雲の清地に到ります。清地、此をば素鵄

と云ふ。乃ち言ひて曰はく、「吾が心清清し」とのたまふ。此今、此の地を呼びて清と曰ふ。

彼処に宮を建つ。或に云はく、時に武素戔鳴尊、歌して曰はく、「や雲たつ 出雲八重垣 妻ごめ

に 八重垣作る その八重垣ゑ」。乃ち相与に遘合して、児大己貴神を生む。因りて勅

して曰はく、「吾が児の宮の首は、即ち脚摩乳・手摩乳なり」とのたまふ。故、号を

二の神に賜ひて、稻田宮主神と曰ふ。已にして素戔鳴尊、遂に根国に就でましぬ。

一書に曰はく、素戔鳴尊、天よりして出雲の簸の川上に降到ります。則ち稻田宮主

簀狭之八箇耳が女子号は稲田媛を見して、乃ち奇御戸に起して生める児を、清の湯山

主三名狭漏彦八嶋篠と号く。一に云はく、清の繫名坂輕彦八嶋手命といふ。又云はく、

清の湯山主三名狭漏彦八嶋野といふ。此の神の五世の孫は、即ち大国主神なり。篠

は、小竹なり。此をば斯奴と云ふ。

一書に曰はく、是の時に、素戔鳴尊、安芸国の可愛の川上に下り到ります。彼処に神

ふ。夫れ汝が治す顕露の事は、是吾孫治すべし。汝は以て神事を治すべし。又汝が  
 住むべき天日隅宮は、今供造りまつらむこと、即ち千尋の栲繩を以て、結ひて百  
 八十紐にせむ。其の宮を造る制は、柱は高く大し。板は広く厚くせむ。又田供佃  
 らむ。又汝が往来ひて海に遊ぶ具の為には、高橋・浮橋及び天鳥船、亦供造りまつ  
 らむ。又天安河に、亦打橋造らむ。又百八十縫の白楯供造らむ。又汝が祭祀を  
 主らむは、天穗日命、是なり」とのたまふ。  
 是に、大己貴神報へて曰さく、「天神の勅教、如此慇懃なり。敢へて命に従はざ  
 らむや。吾が治す顕露の事は、皇孫当に治めたまふべし。吾は退りて幽事を治め  
 む」とまうす。乃ち岐神を二の神に薦めて曰さく、「是、当に我に代りて従へ奉る  
 べし。吾、將に此より避去りなむ」とまうして、即ち躬に瑞の八坂瓊を被ひて、長に  
 隠れましき。故、経津主神、岐神を以て郷導として、周流きつつ削平ぐ。逆命者  
 有るをば、即ち加斬戮す。帰順ふ者をば、仍りて加褒美む。是の時に、帰順ふ首渠  
 は、大物主神及び事代主神なり。乃ち八十万の神を天高市に合めて、帥ゐて天に昇

(327 頁後半)

天照大御神の  
天河原アミノカハラ



(323 頁 7 行目他)

ヒト カミ  
「零の神」

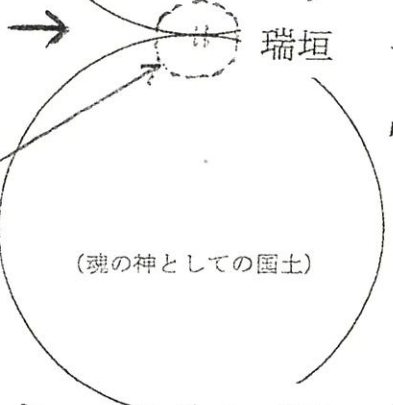
(323 頁)

隠身カクリミの神  
純男ヲノカギリ神聖カミ  
天祖アメノミオヤ  
天津神アマツカミ

瑞垣

生  
み  
成  
す

宮(やど) → 宮ミヤ  
秘目 → 秘ヒメ  
道 → 天浮橋  
アマノウキハシ



タマ カミ  
「魂の神」

(注) 零の神の多くは必要に  
応じて奇身魂をまとい、  
に降りて魂の神と  
しても活動するので、  
同じ神名でも区別を要する

須佐之男大神の  
須賀宮スガノミヤ

玉垣

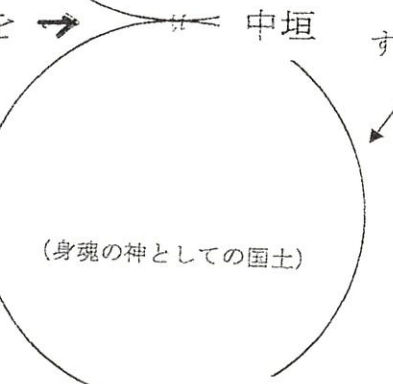
生  
み  
成  
す



ミ カミ  
「身の神」

(326 頁末 ~ 327 頁初)

大國主神が  
天詔琴アメノリゴトを  
かきなし給ふ処



生  
み  
成  
す

ミタマ カミ  
「身魂の神」

次第次第に  
精より粗に転化  
↓  
単純より複雑にと  
組み直される

八雲立つ  
出雲の国の秘宮ヒメミヤ  
**(出雲大社)**

荒垣

生  
み  
成  
す

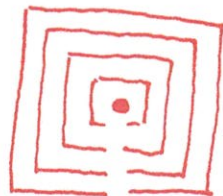


ヒト カミ  
「人の神」 = 「完成された日止」  
奇身魂  
直日

日少宮 ヒワカミヤ

日隈宮 ヒスシミヤ

一方、  
伊勢神宮は  
単独で、五つの階層全体を  
象徴している。

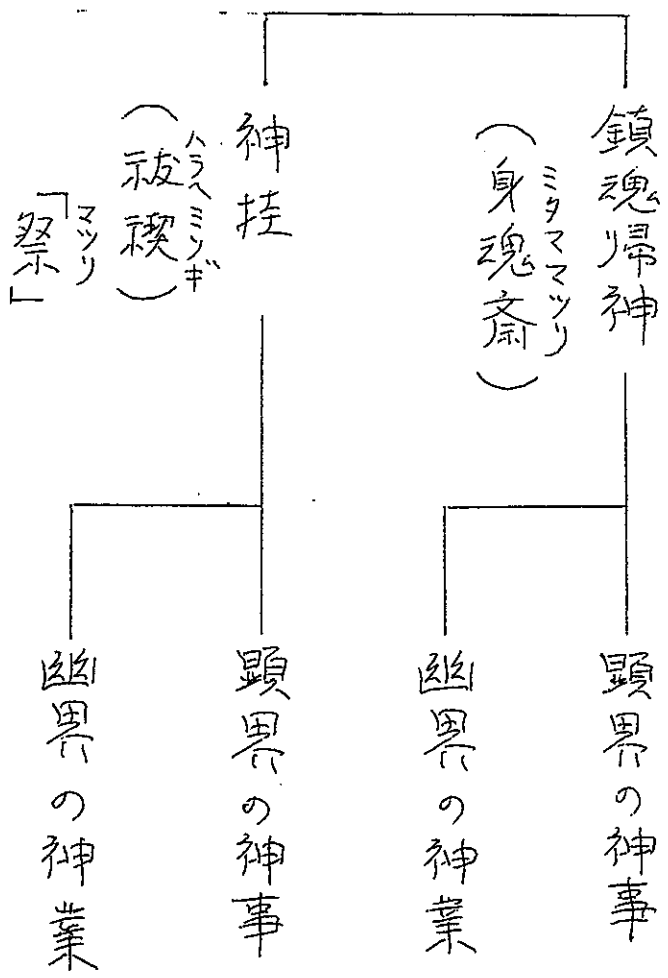


四重の垣は各々、(内側から)  
瑞垣、玉垣、中垣、荒垣の象徴  
中心の本殿は神界を表す。

鎮魂婦神とは

身魂齋みたままつりで、遊離の諸魂を招致奉齋して高天原を築き日ひと火ひと日若宮ひのわかみやとの宇宙を産出し長養して神國たる人類世界と成さんとし成すなる禍津日まがつひ・八十禍津日やそまがつひ・大禍津日おほまがつひ・直靈なほひ・大直靈おほなほひの神事であり、神挂かみかかりとは現身を調伏し濟度し救出して白玉身みずかと成して自ら其の白玉身裡に白玉樓閣うたまかどを築き、之れを磐境いはさかたる胎磐かがみとして鏡かがみとし鏡の船ふねとして極大極小の比ひを招祭りて直日なほひ・大直日おほなほひの人と成りて生誕するの祓禊はらへみそぎで、天照大御あまてらすおほみ神かみたる天御鏡あまのみかがみのみこと尊あれまし誕生の神儀尊容あまのみかがみのみことであれましある

日本民族の信仰 (一)



ある。

その伝へは幸にして古事記や日本書紀などに委しいから、人人は須らく熟読究明すべきである。

第七章 終

## 第八章 少彦の協力

「一にして二にして三にして四にして五にして六にして七にして八にして九なれば十と呼ぶ」とは「宇宙は統一躰なり」との義で、数を以つてそれを説明したのである。それだから、之れを数理観で宇宙観で、また、人身観だと云ふのである。

此の数の活用が神界をも、魔界をも現出するので、「鎮魂祭の糸結び」が行はれる。

魂の緒を結び結びて人は皆神とこそ成れ。日月隔てず。

日に夜にも結び留めたる君が魂。八代九重に仰ぎこそすれ。

高魂の神の御子に暴悪で何うにも教へやうの無い神が在られた。大穴牟遲神はそれを良く養ひ育てたために出雲国を完成して大国主神と成られた。

暴悪なものを制御しようとするれば、それにも増した暴悪な力を持たねばならぬ。その暴悪な力を繰して神業に随順する。

それは、「神と成りたる魔」であることを屢々繰返して述べたが、そのやうな神魔の協力に依つて人天万類を



「毒を以て毒を毒する」のことはなく、「毒を交じて薬と為す」ものである。それならば、どうして「毒が薬に変わる」だらうか。

それには、二つの道がある。その一つは、毒を毒のまままで分量と時間と空間とに適応させる。然うすれば、毒も薬の役を為る。是れは所謂政治家と呼ばれるものの慣用手段である。他の一つは、それとまるで趣を別にしてゐる。

それは、神音と神象と神数との活用に依つて醜を美に悪を善に邪を正に轉換させるので、用の方とか使ひ場所とか使用の時とかに關はるのではない。「神音を稱へ神象を画き神数を算む」。すると、禍津毘と稱ふところの醜も邪曲が極底最下の火と化して根堅洲国を築成する。

そのさまを「大祓の祝詞」が僅ながらも伝へてある。その中の文章の一部と行事中に稱へる秘詞とは神音である、行事中に画するは神象であり、齋部の算むは神数である。さうしてその全部が行はれば、瀬織津比咩・遠都比咩・氣吹戸主・遠佐須良比咩の神座が成立する。それは則、日若宮で、日隅宮で、 $\odot$ である。

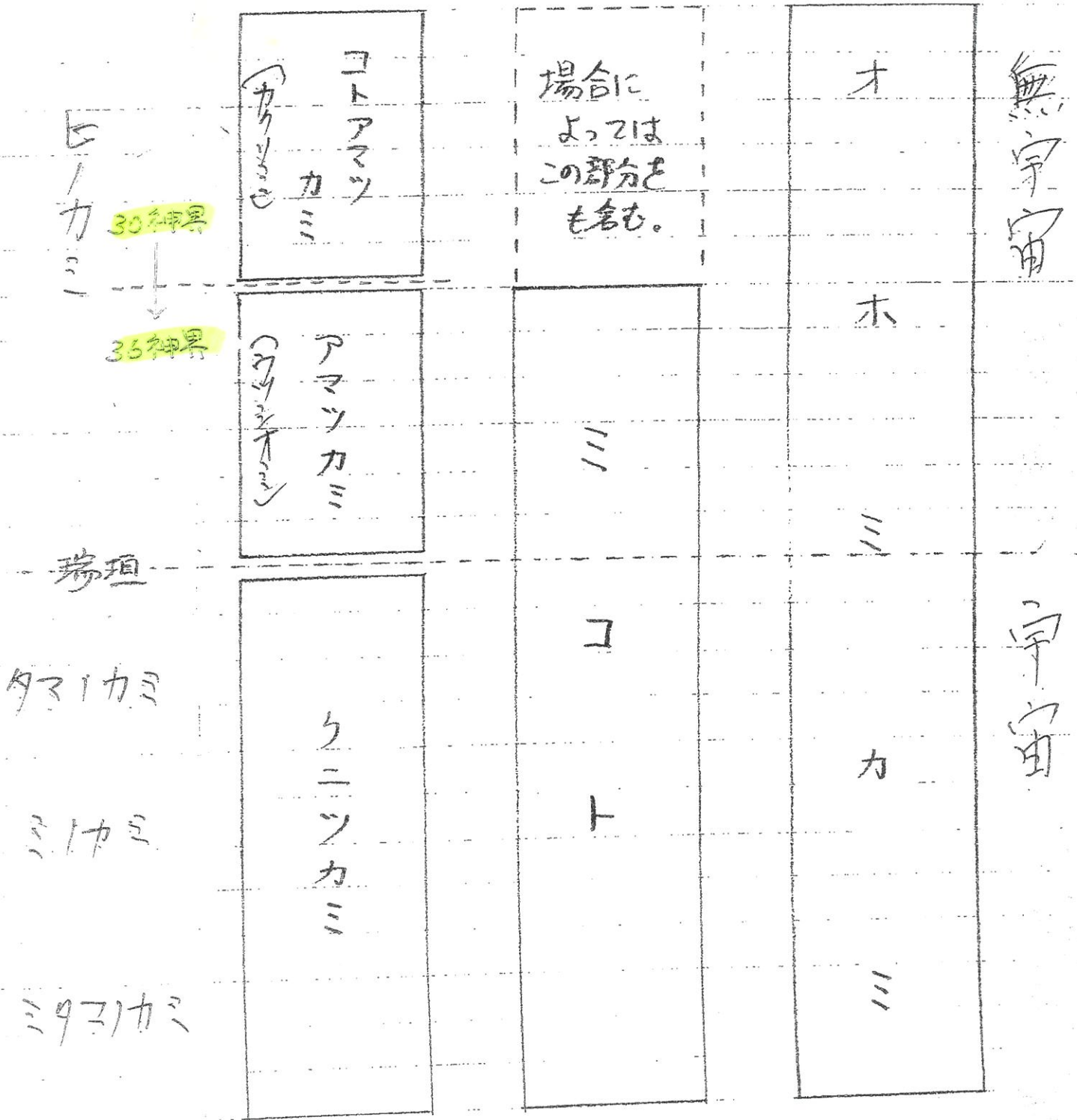
かしこしや。此れ是の極底最下の一線は、即是れ極大無限の一線。線にあらず面にあらず点にあらずるの点線画なればとて之を画いて「ヒ」となし之れを算んで「イ」となし之れを詠ふて「ム」となす。

神界構成妖魔群。昨是今非術魂城。出沒浮沈三惡道。願望一夕冢間煙。

立ちのぼる煙の糸の結び来て立ち舞ふ姿神ながらかも。

天地の神の心を畏みて人の世何時も浦安くこそ。

# 概念図



無  
宇  
宙

コトアマツカミ  
(カケリミ)

アマノカミ  
(ウツシオミ)

ヒノカミ

三  
眞  
子

瑞垣

宇  
宙

クニツカミ

ツマカミ

ミノカミ

ミタマカミ

ヒトカミ



上半分は一つにまとめる  
「天祖-天照大御神」

下半分は三つに分けて  
「アマテラス-ツクヨミ-スサノヲ」

靈は尋で、一で、火で、空界  
で、不で、現在にあらず、過去  
にあらず、将来にあらずして、  
過去にても、現在にても、将来  
にてもあるなり。

魂は二で、一で、日で、光で  
現在で、過去で、将来であると  
共に、現在にあらず、過去にあ  
らず、将来にもあざざるなり。

現身は過去と将来とを伴ひ、  
佛國は淨穢無くして淨穢を知る。  
娑婆即寂光淨土なりとは、淨  
穢を知りて淨穢に染せざるなり  
との義にして、佛身なり。

祖神と  
祖國の

あらざれとも水を出し、  
鷲津見は水に火を言ふ。

宇宙とは十にして統一體なり。  
十字架とは十にして、宇宙を  
失へるなり。

之れを耶蘇と呼びて基督を産  
出すべき胎なり。

火神にして光を出すべき體な  
り。

之れを水と呼びて火の築きた  
る泉なり。

曠野の内に生じて、曠野の外  
に在るなり。

故に十二にして四十の結びた  
るなり。

眞賢木は垂手にあらずして垂  
手を造り、火神は日にあらずれ

ども日を産出し、天真井は水に

図表：火神と日神 (ともに零の神)

	イハサカ 磐境としての	ムスビ	タカミハラ 高天原の主神
神名の上 での区別	アマノミナカヌシノオホミカミ		アメノミナカヌシノカミ
用語や 神象の上 での区別	アマテラスメ 天照皇太御神		アマテラスオホミカミ 天照太御神
	ヒノカミ 火神 (零でーで)		ヒノカミ 日神 (二でーで)
	ナホビ 直霊、○、境地		ナホヒ 直日、◎、实在
	両者の活用を指して		☉ (天照坐皇太御神) と云う。
その他 数理など	「ノ」 浄土、火国、皇土	✕	「カミ」 天祖、大中心
	「四十」、胎、零の海		(四十の結びたる)「十二」

「零の海」これ自体には、本来「箇体」(数理で「五」)は存在していないが、それでも、「零の海」は全体として一個の「統一体」(数理で「十」)である。故に、「箇体の原型」を象徴する「四」の「十倍」で「四十」となる。

以上、秘稿の「命」および「祖神と祖国」より。

ト  
フ  
ミ  
ヨ  
↓  
ビ  
↓  
タ  
マ



# 月の御歌

多田山公

今の暦法で月と言ふのは可笑な話で、陰暦でこそ月もあれ陽暦は日と年とがあるだけである。

が兎に角、月々のお歌をと、て坐つて見ましたが、一年には必しも十二回ではない。

そのあまりの月がある。まづ、その閏月と称する第十から筆録いたします。

◇  
日本古典の中でも特に重要な節が雄略天皇の御代に記され

ある。  
大皇が、大和の葛城山へ行幸な

アハ、マカトヒヒトコト ヨコトヒ  
「吾者。雖惡事而一言。雖善  
ヒトコト コトサカノカミ カツラキ  
而一言。言離之神。葛城之一

トスシノカミナリ  
主之大神者也。」とて、その姿をお願はしに

此の神の神言靈に由つて此の娑婆を神界楽土と築成すべきことを教へられたのが「十三」の秘教を活用すべしとの意味で、左の如くである。

トヲ カガミ  
「十あまり三つの鏡を取り挂

ヒトコトシ カミカカリ カヅラウツ  
けて一言主の神赫灼その神楽歌

フヤ クス  
綾に奇しも。」

マカトヒヒトコト コトサカ カツラキ  
「禍事も唯一言の言離の葛城

メシ ヨ  
主は善しとこそ宣れ。」

◇  
それから當月は師走と陰暦では呼びますが、十二と言ふ数は窮数の裏の「四」の三倍であるから最大の数で、いかに騒いで居る群生でも、此の数を得れば満足せざるものは無い。

ヒト コ カツラヒザマツ ミ  
「人の子は唯跪き満ち満ちてる

ミクラ マヘ ヲツヒザマツ  
御倉の前に唯跪き。」

伊邪那岐大御神の御神徳だと承つて居ります。

次は初に帰つて一月の歌。

ミチ クマクマナ メク メク キ  
「道の隈隈無く回り回り来て

ミト ミチ エ  
元のはじめに道を得しかな。」

是れは、天祖(アメノミオヤ)の御教で「ハジメ」であります。

漢字では、元とか一とか書いて居ます。

◇

二月は本来、風波擾乱で寧日無しとの義から、如月(キサラギ)と呼ばれたと言ひますが、その本義を忌みて世人には知らせないと申されますから、之れは所謂、秘密である。

オハカハナ  
「いささ川川波立つと見るほ

チヂ  
どに月はくだけて千千に散り行

く。」

これは既に前々から発表されたので、月夜見・月弓・月讀命(ツキヤミ・ツクユミ・ツキヨミノミコト)の秘言靈と称して妖魔調伏の妙音である。

三月は陰暦なら、先師川面凡児翁

「桃の花赤、

来にける」とあり

とにふさはしとつ

居りました。

もものはな あふ

をとめこが 春

若菜摘むなり。

子女生産の秘言が

すが、唯表から見

は説明すればよい

「生産靈・足産靈

生魂・足魂・玉積神

玉・玉留玉」九魂の妙音である。

以上  
昭和二十一年十一月  
四月  
桜花 咲き

# はるひひめ

## 多田山山谷秘稿

行く歳の空打ちまもり我立て  
は雁の一連西に行く見ゆ。

ゆく人の皆清かれと知るかぎ  
り皆明かれと神ながら神のうけ  
ひて神かかります。

他を教化するの難事なるは、  
目他を了得したる上にて、他の  
醜惡邪曲なると同一歩調を持し  
つつ誘導せざるべからざるが爲  
なり。

於此か禍津昆の行を要す。

禍津昆と共に遊行しつつ禍津  
日の神業を行ぜざるべからざる  
ものなれば之れを火人と呼ぶ。

妖魔を調伏濟度するは火徳に  
依らざるべからざるを以つてな  
り。

之れを祓と称して伊邪那美神  
の主りたまふところなり。

八種言にして黄泉醜女にして

坐黄泉戸神にして、道反神に  
して道敷神にして、非にして否  
にして緋にはあらずるなり。

黒色黒光にして陰極にして陽

極にして零なる靈にして、〇に  
して□にして、◇にあらず田に  
あらず醫にあらず、固より〇に  
ても〇にてもあらずるなり。

之れを昆古と呼びて破壊し了  
りたる毀なり破壊の極なり。

スリにして修理にして、固成  
にあらずるの固成なるなり。

女の極にして、女岡きの女な  
れば岡象女と称するなり。

他を教へんとすれば禍津昆と  
ならざるべからず。

之れを三十五となしハルヒヒ  
メと呼ぶ。

ハルヒヒメはその面貌醜惡に  
して鬼畜の如くなれば、之れを  
醜女と呼ぶ。

醜女は伊邪那美神の主るとこ  
ろにして伊邪那岐神の投げ棄つ  
るところなれば、伊邪那岐命伊  
邪那美命二柱神の産出したる天  
照坐皇大御神天照皇大御神天照  
大御神にてましますなる天照大  
御神建速須佐男月讀命にして、  
月夜見月弓月讀命にして、建速  
須佐男尊にして、三貴子なり、  
三重子なり、三種神器なり、八  
種言神なり、十種神寶なり。

大禍津昆にして八十禍津昆に  
して禍津昆にして大直日神には  
あらずるなり。

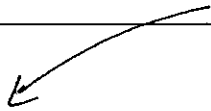
大直靈にして八神にして十神  
にして大食津比賣にして櫛稻昆  
賣にして少名昆古にして薬師神  
にして奇靈怪異なる稻倉玉尊な  
り。

以上

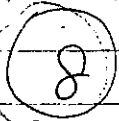
天照大御神 → 八百萬神

大同進 → 八十神

Date

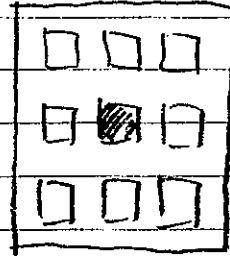
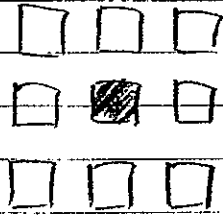
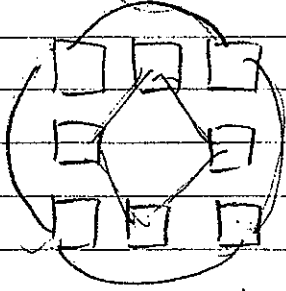


(4の2倍)



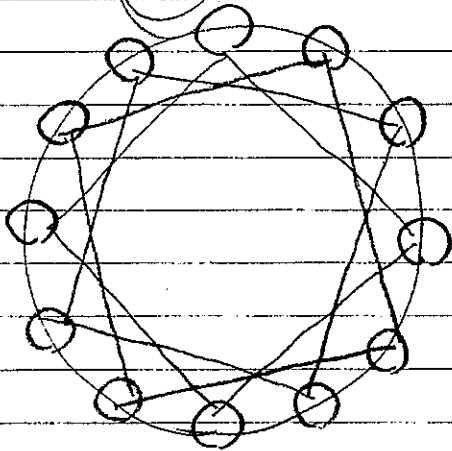
9

(10)

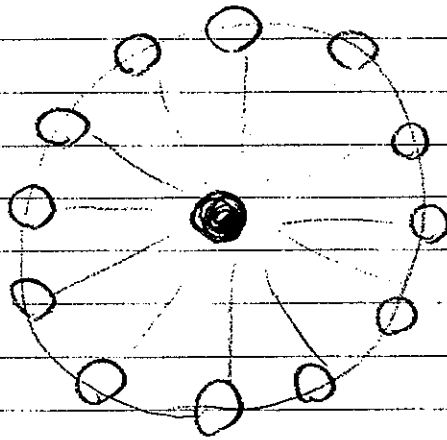


ヤマタのクニ  
カミヤマトリ

12



13



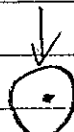
4の3倍で

これがさらに中心を得て、

外周が全部233

神界が築成される。

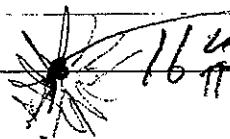
(外部)



中心と外部

十六弁笈花紋

の完成



16弁

4の4倍

中心 ——— | (天照大御神)

外部 — 35. ( $3+5=8$ )

合小せて — 36神界 — (9)

(高天原)

35は、中心が不在の状況を示し、

数理としては、外部としての8に等しい、

これに中心の1を加えて、初めて完成した、

これが36神界としての高天原であり、

数理としては9に等しい、

外部だけでは、マカツセであって、

中心を得て初めて、カミ (マカツセ) となる、

# 三十五神界

$$\textcircled{35} \quad 3+5=8$$

数理としては、8と同様に外郭を表す。

8に中心の1を足して9となるように。

この35 (ハルヒヤ) に中心の1 (イツヲシ) を足して

36となる。

故に、天照大御神の神界を36神界と称する。

[ 5男神 → 23神 (鎮守神)  
3女神 → 12神 (産土神) ]

対心



「一、二、三、四、五」と「六、七、八、九、十」は表裏の関係  
(五が中心であり、五を足し引きして同じ)

177の数の中では、「九」は最大の数

「四」はこの裏面なので、同じ「最大としての性質」を分けて持つ。

よって、その三倍である「十二」は「最大性」を象徴する数とされた。

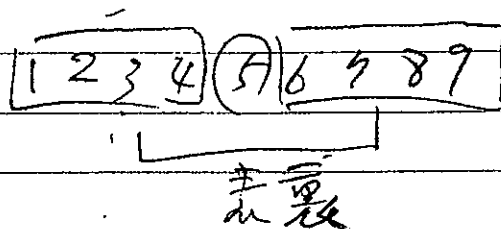
「十二以上のものはない」のたがら、これを群生でも、

「十二」を足せば満足する。

即ち物事は12で一旦「完結・完成」しており、

これを越すと「ひと」にまためた秘数が「13」である。

(8と9との関係と相似)



ひとかた

為田流では 数理で  $N$  と表現される存在が 一歩  
 一塊 (ひとかたまり) にまとまって  
 次の段階の存在となった時に、その新たな存在を  
 数理としては  $(N+1)$  で表現する。

例. 素材 (四) <sup>ヨ</sup>  $\rightarrow$  筒体 (五) <sup>イ</sup>

1に2に3に4に5に6に7に8に9に10

未来322頁。「十指両掌」では) 23  $\rightarrow$  24

これらの教理は、「<sup>イツヨ ナナヨ</sup>五代で七代だから、 $5 \times 7$ で35だ」とか、「三の十倍に六を足して三十六だ」などと説明されることもあるが、より本質的には、35は $3+5$ で8の教理と、36は $3+6$ で9の教理と同様の意味なのである。

「8」とは外郭であり、そこに中心の「1」を加えて、統一体としての「9」になる。

即ち、ハルヒヒメは、<sup>まろ</sup>三貴子という「中心」に服ふ、「外郭」  
(35)  
であり、これが完全に神化した暁には、そこは  
『天照皇大御神の築きたまひて、天照大御神の知しめし  
まします、天照皇大御神の神界』としての「高天原」  
(36)  
となるのである。

(コトワマとしての「ハルヒヒメ」に関しては、また別稿をもうける。)

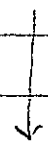
2018.1.30.(火)

NO.

DATE

未来 (338頁  
339頁 (十指両掌 第七節)  
340頁)

30神界 (天地初発 コトアツカミの領域・境地  
神界は未完成 また「主神」が不在の状況)



36神界 (「主神」を迎えて完成した神界の標。  
アマツカミの神座  
カミクラ  
主神の称号は、造化大神とも  
ニ柱御神とも  
三貴子とも いう。  
(七の秘事、と参照)

30神界 極大極小の零界 大平等海  
また「中心も外郭も区別のない状況」



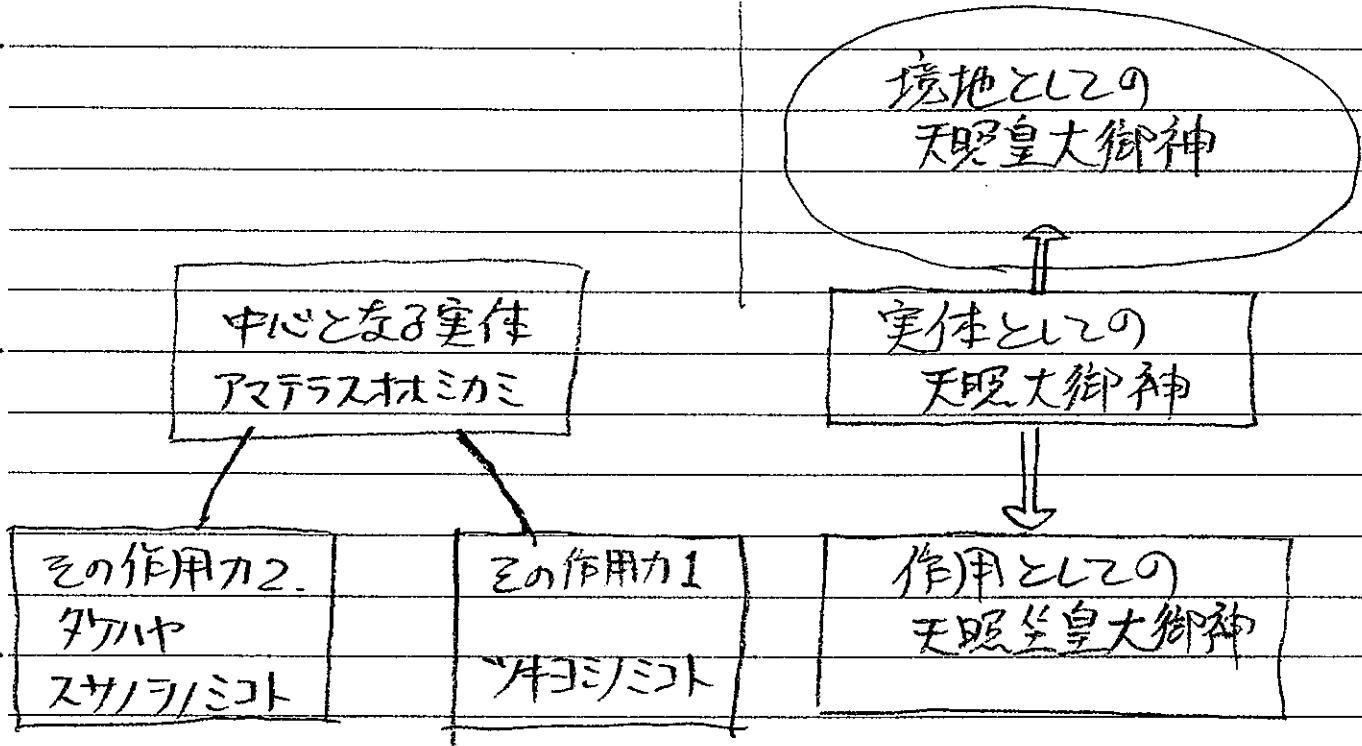
零が結び結んで、稜威の神の産霊産魂が完成を承けた時

36神界 中心と外郭とがはまりした状況  
即ち「主神」が存在する状況

「主神」と三柱と数える際の二つの考え方

「神」(実体)を中心に考える。

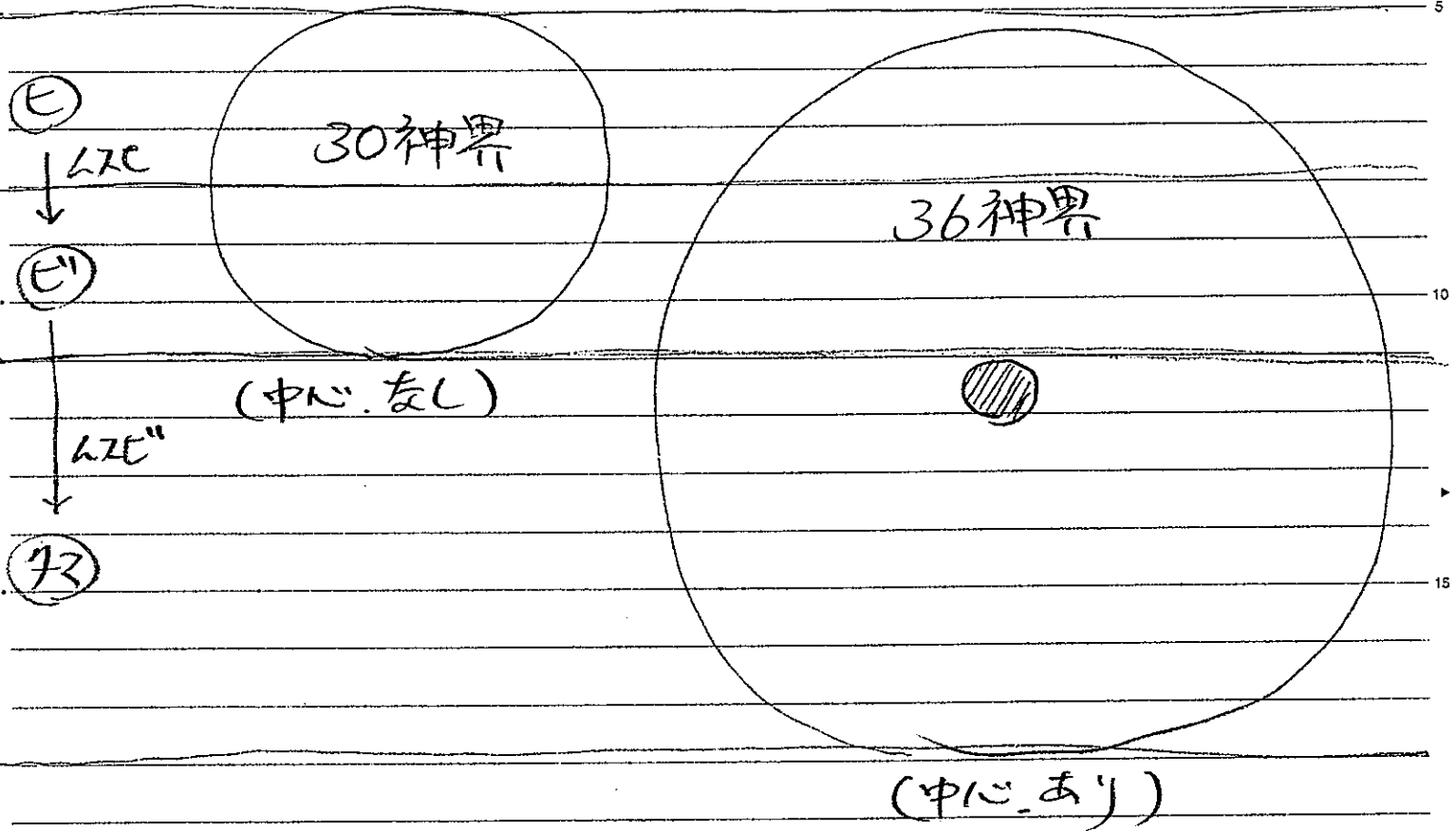
実体のみならず、  
境地まで考慮する。



単なる「境地」だけでは、30神界だが

ここに「中心」が在<sup>あ</sup>って初めて36神界となる。

# 無宇宙の三段階



経338の「産産産」は

$E \rightarrow E''$ 、 $E'' \rightarrow 72$  のこと

山外に水無く

山下に人無く

山上に光無き時は奈何に。

◎

作州白岩永吉

星光る 梅雨霽ツユバレの夜を 禊して 帰れば将いづや 家の明けたる。

評云 神界妙光。日夜不断に、人を教へ、世を導く。

知らざる者のみ、ひとり、之レを知らざるのみ。

未  
来

十字架の信仰 (五)

未来第七天皇篇第二章神界の成壞第二枚末行以下に、天皇后完成の御系譜を載せてある。

「コノクニニヤマトクミタカラクシテ為降地球上於日本民族。スリカクメナサシメントテ修理固成於多陀用幣流国而。アマノヌホコラヤマトスメラギミニタマヒシナリ賜天沼矛於日本天皇也。」

手書きのメモ: 十字架の信仰 未 来 1/147 ~



授賜於天沼矛神事而ソノアマノヌホコノカミワザラサツケタマフトテ 伊邪那岐神イザナギノカミ 天浮橋而アマノウキハシニシテ 以沼矛ヌホコモチ 塩許袁呂許袁呂邇画鳴者シホコヲロコヲロニカキナシタタマヘバ  
ソノシホノシタタリツモリツモリテシマトナリタルバ 垂落塩累積成嶋オノコロシマトマラスナリ 淤能碁呂嶋是也。

淤能碁呂島者オノコロシマトハ 天御柱アメノミハシラ 国御柱クニノミハシラ 而ニシテ 八尋殿也コレスナハチャヒロドノナリ 天御鏡也アマノミカガミナリ 美斗能麻具波比也矣ミトノマダグハヒシテ

美斗能麻具波比而ミトノマダグハヒシテ (云云) 十柱相互言トハシラカタミニノタマハク (云云) 於此カクテ 生子者ウミマシシミコハ (云云)

ここに、「天浮橋アマノウキハシ」と云ふのは、球と球との接触面なので、 $\bigcirc$ でもあり、 $\infty$ でもある。が、古伝では、 $\textcircled{3}$ であり。日である。そのことを、

未来第十言靈篇天地アメツチの宇氣比ウケヒ第六章十指両掌第二節には、次の如くに記してある。

「人類世界に神の与へたまへる瑞宝としての数理と言靈と神象とを天浮橋とたよりて、我等凡愚の其のままに、神の国には升起得るのである。

此の(た)よりとは、球と球との接触面で、点である。此の点は、幾何学に、長さも無く幅も無くして位置のみ有ると云ふが如きものではなく其の位置としての長さも幅も有るのである。けれども、人間的に計算することは容易でないから、普通学の範囲には置かぬのである。

球と球との接触面たる一点は、神の秘宮で、天津神と国津神との相交はるところで、成り余れる一点と成り合はざる一点との相回り相遇ひて国を生み成す「零トコロ」である。零レイで一イチで、無より生ずる有としては、火と呼び無に帰する有としては、日と称へ、日少宮ヒノワカミヤと伝へ来つたのである。之レを秘宮とか天浮橋とか称へまつることは、人間身として知り得ざる奇靈クシヒであるからでもある。

古典に、「天浮橋に立たして望み見たまふ」と伝へたる神は、伊邪那岐命伊邪那美命二柱命としても、天忍

穗耳命としても、いづれも共に、新しき国土を生み成し給はんと御準備遊ばさるる時なので、零の神が魂の神としての国土を生み成す時、魂の神が身の神としての国土を生み成す時、身の神が身魂の神としての国土を生み成す時、また、身魂の神が人の国を生み成し給ふ時、等と、次第次第に、精より粗に、清陽より重濁にと転化し、或は、単純より複雑に、簡素より繁多にと組み直さるる時、その代り目、それを「秘」と呼び、その胎を「宮」と称へ、その通ひ路を「天浮橋」と仰ぐのである。」

之に由つて、先に載せた「美斗能麻具波比神言靈」の教ふところは、☺であり、☐であり、日であり、さうして、伊邪那岐命伊邪那美命二柱祖命であることが知られる。則、天地と呼び、神魔と称する経緯の存在が、産霊産霊成り成る事実を指示したので、やがて、それが、伊邪那岐神の神界と、伊邪那美神の魔境とで、⊕と⊖を示すべきことを悟らるるのである。人間的に云へば、それは、善悪であり、正邪であり、美醜で、曲直で、即、神魔である。然しながら、神代の「カミ」は、然うは云はずして「ウ」なりと教へ給ふ。

よしあしの隔てもあらで、かみながら、唯往き返る波の音かも。

此のやうに称へて、「ウト」と教へ、「ウトノミヤ」の秘言なりと知らしめ給ふ。

しもつづら、くるやくるやに、河船の、もそろもそろに、曳き来縫はせる。

ああ。

結びては解け、解けては、また結ぶ。

神魔剖割、人天往返。如是生。如是滅。如如去来。

今日、今時、仰ぎては見る。十字架上死生解脱の主。伏しては聴く。根之国底之国妖類魔族の叫喚。

それで、今挙げた「十指両掌」の第六節に次ぎの本文のあるわけが判る。

あなかしこ。

神の代の栄光は涯ても無し。

その慈光限り無し。

烈烈たり。

赫赫たり。

而してまた、

穆穆たり。

ああ。されど、

人の世界は、鬼畜妖魔と離るること能はず。否、人間以外の六道十界とはあらざるなり。然り。而して、神、  
之レを

「よし」と宣ふ。

美しきを求め、正しきを願ひ、善きを行はんと思ひ煩ふ人の子を、神また、

「よし」と宣ふ。

善か悪か、美か醜か、生か邪か。唯是レこの存続を願悩希求して燃えに燃ゆるなることをも神また、

「よし」と宣ふ。

まことに、

這は教にあらず。

釈尊拈華。復、言說せず。

日本神道言挙げずして、神国築成せらる。

之レを、第三十六神界主神の秘と称へて、宇宙完成の妙徳なり。大日本天皇帝完成の秘儀また這の裡に備はる。日本古典は、之レを伝へて、「天沼矛」と称へまつる。

「這は教にあらず。然りと雖、

教は這にあらざるにあらず。」

誰か掲ぐるものぞ。十字架上昭昭琅琅の「ヒ」。

イエスは云へり。「我に従はんとするものは、己が十字架を負ひて来れ」

以上 昭和廿六年七月廿四日意富宮例祭日

①  
吹く風フカセに笹ササの葉ハ擦スベの面白オモシロく小鳥コトリの歌ウタを誘サツふべらなり。  
底深ソコフカき真名井マナキの清水シミヅ汲クむ人はヒト縋ツルこそ力チカラなりけれ。

右二首は多田タイ子が折にふれて詠みたるなり。

## 第六章 十指兩掌

### 第一節

十指兩掌は「カズカズ」と読んで人間世界の数理である。若しも此の数理の運用が無いならば人が人としての向上発展をすることは出来ない。

十指は「ヒト」で、分ければ「一二三ヒ四フ五ミ六ヨ七イ八ム九ナ十ヤ」で、生産築成を教へる。兩掌も人で、分ければ「ミギリ・ヒダリ」で分割と統合とを教へる。此の十指と兩掌とを合せて二つにすれば、陰陽で男女で雌雄で乾坤で天地である。がさて、此の数の聚散離合には順逆があり清濁があるので、人はその運用の如何に依つて向上もすれば向下もする。順に清く明く進めば向上するので其の算みかたは「ヒフミヨイムナヤクト」である。その様に順に数へて二十三になる。二十三と云ふのは十指兩掌拍手の「參進」で「三が一を生みだすのだ」と伝へたる子女産出の妙用で、その完成した時には一点に帰つて二十四と成る。之レは大平等の空界であるから二十四の零とも呼んで神子産出の母胎である。

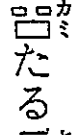

此の胎中に養ひ育てられたる神を第廿五神界の主神と称へて、日本古典には「天津彦彦火瓊杵尊」と伝へたのであり、その御親神天忍穗耳命とは廿四の零神にましますので葦原中国には御降臨遊ばされなかつたことが判明するのである。が、之レは「神代紀」の伝へだから人間身の事でも人間世界の数理でもない。人間身が既に忘れ、未知らざる奇振岳クシフルタケの秘事で、「零神」ヒノカミとしての御生誕である。

零の神の御生誕を、古事記はその巻頭に隱身の神として、日本書紀は純男として、旧事本紀は天祖として、古々僅に數言を載せ、次ぎには、魂の神の御事蹟が記されてある。ところで、現在の古典は、まことに不幸にして、神界の事理を知らざる俗学者に瀆され、零の神と魂の神と身の神と身魂の神と人畜動植鉞物等との判別も無い雜糅混淆の記載と成つてしまつた。為に、後学は全く津梁を失ひ五里霧中に彷徨するの悲嘆を繰返して居る。此の霧を掃ふに「米」の秘事が有る。それを、瓊瓊杵尊隱身の神伝と教へられたのが現存行事の「散米の祓」である。

祓去り祓来れば、あや奇しくも「天成り地定り、高天原は成り成る。」「その一点を仰げば、神聖国常立尊である。」とは日本書紀の伝である。「その一神とは、天アノノミオヤ 祖天讓日天狹霧国禪日国狹霧尊である」とは旧事本紀の伝である。「その時の神は、隱身天之御中主神である」とは古事記の伝である。「並び給ふ神としてはましまさねば、天照大神と称へまつるのである」とは古語拾遺の伝である。卒然として之等各々を読めば各々別々の如くである。

けれども、是くの如くそれぞれが皆共に「一」である。日本語では等しく之を「ヒ」と称へて有るかぎり在らなかぎり一切合切との意である。乃、「大宇宙」である。人天万類は各自各自に大宇宙としての起伏波瀾である。

ことを明らめ得たる時、各自各自分分個個としての天人万類がそのまま、身魂であり魂であり零である事実を影して一円光明の○と成る。

各自各自が○と成り得たる時、緯としては神界で経としては神代で経緯を合せては十で、共に「一」である。之を「日」であり「日神」であり「人」であると云ふ。その「人」とは、「日止」であり「火人」であることと教へて⊕と描き田とも◇とも品とも品とも日とも串とも申とも伝へて、たる示である。そうして又、と画するのは伏羲の所伝を敷衍したので「湯」であり「ユ」である。それを日本の古典には「中津瀬」と伝へ純真無垢の一点で中心であることを知らしめてある。之を「否なり」と呼ぶ。「そのやうなものの有るのではない」との義である。

珍重珍重。如是の「否」。如如起滅。怪奇至極。故に呼んで「神」となす。之は支那人の「无方」と云ひ「陽不測」と称するところの「神」である。

世界の学者中には此のやうな「神」は日本人云ふ所の「カミ」とはまるで別だと云ふものが多い。さうして、古典所伝の「零神」を忘れようとする。

先聖の教へ遺された大道に荆棘を植ゑ牆壁を築いて神道は民族信仰だなどと呟く。それだから偏狭固陋で役に立たない。

その現状を観れば「何処へ行くのか」と愁へざるを得ない。世界人類は、太古の神伝を忘れて小我の邪見に縛せられ相互に闘争殺戮の惨劇を演じ来つたのである。魂の神としての天照大御神には、之を「かしこしと思はれて」天窟に挿し隠らせ給ふ。「天の下皆闇し」とて、八百万神は高御産巢日神の御子の御教へを仰ぎつつ「



被」を行はせられた。過去を被ひ将来を被ひ被ひ被ひて天窟戸の御前に太祝詞白し太幣帛捧げまつり祭りまつれば、あや奇しくもあや畏くも高天原は明けて天照大御神には天地の在りのことごと御照し給ふ。

「あはれ・あなおもしろ・あなたのし・あなさやけ・おけ」

と、神の国の完成したのは「大被」の神事に依るのである。それは「今日よりはじめて罪と云ふ罪はあらじ」と、式の祝詞に記された如く、「速佐須良比咩根国底国の秘神挂」である。之を「日本天皇三種神器の神徳なり」と拝みまつり畏みまつる。

### 第一節 完

## 第二節

数理観と言靈観とは、神象観と相待つて日本神道の扉を開く秘鍵である。之無くしては神秘を伝ふことも行ずることも出来ぬ。

それ故、難解な説明をも繰返したのである。けれども、之は

日本天皇の神伝なりと拝承しまつるので、微臣の分際としては、その深奥に入るを憚る。仍つて今は、出雲史に就き「日隅宮」の伝へを拝することとしよう。

ヒトミナハ。ウツソミノママ。スミスミテ。ヒスミノミヤニ。スムベカリケル。

伊邪那岐大御神が修理固成の神業を完成しては「日少宮に神留りませり」と伝へてある。此の宮は天津神の秘宮で、零神の常宮で、高天原とも称へて、無経無緯の高御座で、唯一点たる零である。亦の名は大虚空で、

零海<sup>ヒノウミ</sup>で、虚中で、虚天で、天忍穗耳命の神治らすところである。

その御児神は、その国を出でまして葦原中国をその国の如く治ろしめし給ふのだと神は教へ給ふ。色相を以つて之を称ふれば晃耀赫灼たる一円光であり、声音として之を聴けば琅琅として十方に遍き一音響であり、数としては零なる一である。

人類世界に神の与へたまへる瑞宝としての「数理」と「言霊」と「神象」とを「天浮橋」と「たより」て、我等凡愚の其のままに、神の国には入り得るのである。

此の「たより」とは、球と球との接触面で「点」である。此の「点」は、幾何学に「長さも無く幅も無くして位置のみ有る」と言ふが如きものではなく、其の位置としての長さも幅も有るのである。けれども、人間的に計算することは容易ではないから、普通学の範囲には置かぬのである。

球と球との接触面たる一点は、神の秘宮で、天津神と国津神との相交はるところで、成り余れる一点と成り合はざる一点との相回り相遇ひて国を生み成す「零<sup>トコロ</sup>」である。零<sup>レイ</sup>で一<sup>イチ</sup>で、無より生ずる有としては火と呼び、無に帰する有としては日と称へ日少宮<sup>ヒノワカミヤ</sup>と伝へ来つたのである。之を秘宮とか天浮橋とか称へまつることは、人間身として知り得ざる奇霊<sup>クシヒ</sup>であるからでもある。

古典に「天浮橋に立たして望み見たまふ」と伝へたる神は、伊邪那岐命伊邪那美命二柱神としても、天忍穗耳命としても、いづれも共に、新しき国土を生み成し給はんと御準備遊ばざる時なので、零<sup>ヒ</sup>の神が魂<sup>タマ</sup>の神としての国土を生み成す時、魂の神が身の神としての国土を生み成す時、身の神が身魂<sup>ミタマ</sup>の神としての国土を生み成す時、また、身魂の神が人の国を生み成し給ふ時、等と、次第次第に、精より粗に、清陽より重濁にと転化し、或

は、単純より複雑に、簡素より繁多にと組み直さるる時、その代り目、それを「秘」と呼び、その胎を「宮」と称へ、その通ひ路を「天浮橋」と仰ぐのである。

そこに拝みまつる神は「産土神」で、その宮を「日隅宮」と称へて、大国主神の神治らすところである。前に第四章に述べたる如く、世の大人物を造る道に「ミソギ」の秘事がある。それは、人の身が「神の宇氣毘」を得て、此の身此のままに生を代へるので、その時の此の身をもまた「日隅宮」と称するのである。

## 第二節 完

## 第三節

祓禊に、月神事と云へるは、高木神の与へ給へる「弓矢」を持ちて妖類魔族を摧破調伏し救出誘導して神界に入らしむるもので、魂、齋の一儀である。

魂を齋ることは、生死を通じて常時不断に神の行はせ給ふところで、人はその神事に神習ひつつ自他に拘はらず為さねばならぬ大事である。此の齋事が好く行はるるならば其の魂が和らぎ心が平に身は安らかに、万類万物と共に調和を保ち統一を得るので身心は健全強壯に、世界は太平和樂を謳ふのである。

人の身として日隅宮を築くには種種の行事を要するのであるが、特に自他の身魂を常時不断に齋ることを大切とするのである。かくて築き得たる宮は、八雲立つ出雲国の秘宮で、身魂神の社としては、大国主神が須勢理毘売を負ひ生大刀と生弓矢とを持ち天詔琴を画鳴し給ふところであり、魂神の神宮としては、須佐之男大神が櫛稻田比売と共に隠らせ給ふ須賀宮であり、日神の大神宮としては、天照大御神の天河原と称へて、「天津験」で

は、単純より複雑に、簡素より繁多にと組み直さるる時、その代り目、それを「秘」と呼び、その胎を「宮」と  
称へ、その通ひ路を「天浮橋」と仰ぐのである。

そこに拝みまつる神は「産土神」で、その宮を「日隅宮」と称へて、大国主神の神治らすところである。

前に第四章に述べたる如く、世の大人物を造る道に「ミソギ」の秘事が有る。それは、人の身が「神の宇気毘」  
を得て、此の身此のままに生を代へるので、その時の此の身をもまた「日隅宮」と称するのである。

四つの日隅宮のうち、最上段のものと特に日隅宮と称する。

第二節 完

### 第三節

天浮橋は、神話の上では日少宮と同義だが、多田教学としては  
四つの日隅宮すべてに当てはまる用語である。

祓禊に、月神事と云へるは、高木神の与へ給へる「弓矢」を持ちて妖類魔族を摧破調伏し救出誘導して神界に  
八らしむるもので、魂齋の一儀である。

魂を齋ることは、生死を通じて常時不断に神の行はせ給ふところで、人はその神事に神習ひつつ自他に拘はら  
り為さねばならぬ大事である。此の齋事が好く行はるるならば其の魂が和らぎ心が平に身は安らかに、万類万物  
と共に調和を保ち統一を得るので身心は健全強壯に、世界は太平和楽を謳ふのである。

人の身として日隅宮を築くには種種の行事を要するのであるが、特に自他の身魂を常時不断に齋ることを大切  
とするのである。かくて築き得たる宮は、八雲立つ出雲国の秘宮で、身魂神の社として、大国主神が須勢理

比売を負ひ生大万と生弓矢とを持ち天詔琴を画鳴し給ふところであり、魂神の神宮としては、須佐之男大神が櫛

稲田比売と共に隠らせ給ふ須賀宮であり、日神の大神宮としては、天照大御神の天河原と称へて、天津彦彦

あると古典は伝へてある。

そのやうにして古伝を探究すれば幾多の典拠を得られるが、何れも共に大宇宙の大中心なりとの義で、「ヒノカミ」としても「タマノカミ」としても「ミノカミ」としても「ミタマノカミ」「ヒトノカミ」としても、一貫したる中心で、それは、単に、そのものの中心と云ふのとは別なもので、人間的に見てとか五官的に見てとか云ふ範囲での中心ではなく、それを超えての大中心なのである。

それで、此の大中心は、唯一無二の「極」なる「零」である。

従つて、日少宮と仰ぎても日隅宮と称へても、等しく共に別天神コトアマツカミの火海ヒノウミで、大平等海で、綿津見の鎮守ミマモる海で、白玉光である。その白玉光底に潺湲たる泉は、天真名井の「ミモヒ」と称へて稜威三柱神タマノミハシラノカミにてまします。

「タマノミハシラノカミ」をば、数理観にて「零なる一」と解き、言靈観にては「ヒフミ」と称へ、神象観にては「アメユヅルヒ・クニユヅルヒ」と画く。その図を書かねばならぬが、転写誤伝が有ると良くないから他に別に伝へよう。兎に角、そのやうに、此の三つの「たより」に依つて、人人は各自各自に自己の魅得を古典に照らし合せ正しき神の伝へを確認すべきである。

日本神道の正伝を得た人の身には、必、其の証左シルシが存る。

日本古典の中では、「天地と別けこし時ゆ、久方の天津験と定めてし、天河原に、璞の月を累ねて、妹にあふ時をし待つと、立待つに、吾が衣手に、秋風の吹きかへらへば、立ちて坐て、たどきも知らに、村肝の心おぼえず」とあるのがその最簡明なるものである。そのことを、

「天河原とは天津験と断れる如く神人たる証左として人身に授与したる異靈クシビなり。統一魂としての奇身魂な

れば、これをトヲカミと称へ十種神宝と讃仰したる饒速日尊にてましますなり」

と伝へて、十魂尊貴の身だと、神の国では白されるさうです。けれども、葦原中国では、アメノホヒ天菩日とかアメワカヒコ天稚彦とかアマノサグメ天探女などとかががやがやと騒いで居るので、何と云ふか私は知りませぬ。

が、

人の身は何時何処で死なねばならぬかも凶られぬので何時でも美しく死に得るやうにして居なければならぬ。

大君の稜威の身ぞと、我が名をば、清く守らな。御鏡掛けて。

さうして、生前には假令、日隅宮を築き得ずとも、その死に際しては、必、日少宮に帰るべく、日隅宮を築かねばならぬ。

### 第三節 完

### 第四節

まことに、人の身は何時何処で何のやうにして死なねばならぬかも凶られぬ。

それ故、何時でも我が身魂を神の宮と成すことの出来るやうに錬成して置かねばならぬ。

近頃、世間流行の詞に「錬成」と云ふのは、人材を有用に造り上げるものらしいが、それも究極は、満足に死ぬことの出来るやうにすることではなければならぬ。

「満足に死ぬ」と云ふのは、死に臨んで他人から葬礼祭儀の助けを借ること無く、自分自身で自己の身魂を完全に齎ることである。

それには、平生行往坐臥の間に自己を齋りつつあると共に、過つて火中地底に墮在せる都べてのものを教へ導きて、共に同じく日隅宮を築く方途を攻ぜねばならぬのである。之は日本神道に於ける最要至重の行事で、人と云ふ人皆が寸時も怠つてはならぬ任務と云ふべきである。此の行事に対する自覚さへ出来れば、人間世界は固より各界各宇宙は和らぎ睦み太平和楽を謳歌するに到るべく「惟神言奉せぬ国」と伝へて来た意味も判るのである。

「カミナガラ、コトアゲヌクニ」と云ふのは、何んだ彼んだと文句を並べたり無闇に説明ばかり求めたり宣伝戦を気にしたりすることなく、常に大中心を仰いで「都べてを捧げまつる」神の道が明瞭して居る世界だと云ふ程の義である。

正しい意味での宗教は必ズ此の「捧げまつる」ことに立脚して居る。民は君に都べてを捧げ、児は親に都べてを捧げ、妻は夫に都べてを捧げ、子弟は師父に都べてを捧げ、人天万類は天神に都べてを捧げまつる。

之を「ミチ」と呼び「ミソギ」とも称へて「オノヅカラナル、ノリ」則、大宇大宙の真理で事実で、「日本神道」なのである。亦の名をば「日本国躰」と仰ぎまつる。従つて

日本建国の精神は全く宗教的である。

と云ふと、或は日本国躰を宗教だなどとは「けしからん」と敦圀く人が有るかも知れぬ。けれども、何も彼も「上げてしまへ」と云ふのは、神と人との關係に於て初めて徹底する思想であり行為であるから、それは明に「宗教」である。さうして、生死を解脱したるもので、その活用を觀めては「日本精神」と称するのである。

世に天理教と呼ぶ邪教が何彼と非難されながらも多くの信徒を集め得たのは「上げてしまへ」と云ふ思想を生



かして居るからである。

コトサヘグ、カラノニタチテ。カミナガラ。コトアゲヌミゾ、カシコカリケル。

「中心から出て中心に帰る」。それだから「上げてしまへ」と事新しく叫ばずとも、またその自覚せると否とは関はず人天万類皆共に何時かは一切合切をその本に帰さねばならず、帰させられ、帰つて往くのである。

此の筋道を吾と我が身に躰得悟証する為に魂齋の行事をするのが、自己の魂を齋るものである。此の間の消息を「中分本末、旋回統一。按分平差。転換平衡。身境不二、頭幽一体。躰頭神神、超楽無窮。」と先師は伝へられた。之は全神教趣大日本世界教の根柢を成すものである。

ところが、世には何を間違へてか、先師の遺された法人団場で「中心が中心らしくせぬから外廓が乱れ騒ぐのである。

それ故に、中心を中心らしくさせる為に日本祭祀の制度改革を為ねばならぬ」と叫ぶものが出て来た。何と云ふ悲しむべきことであらう。

成程、外廓とは中心の拡大であるから、外廓の混乱は、とりもなほさず中心が良くないからである。けれども、そのやうな意味での中心とは、分分微微の各個躰の群中心を見てのことだから相対的存在である。ところが

日本天皇国に於ける祭祀は超絶的行事であるから「相対的中心」などとは在るべからざる詞である。然しながら、人間身心は雑糅混淆の存在だから対立の中心をも認めざるを得ない。そこで、敵の大将とか味方の元帥とか、自国の帝王とか他国の大統領とか、自己の中心とか他人の根本魂とか云ふ。則、個個分分には個個分分の中